

## 第4章 総括—畦地7号古墳の再評価を中心に—

市道1-57号北市場市田線他にともなう今次調査では、畦地7号古墳の墳丘・周溝を把握したことが主要な成果である。過去調査の成果と今次調査の成果を合わせて考察し、当古墳の再評価をもって総括したい。

**古墳の構造** 今次調査で新たに畦地7号古墳の墳丘東端の一部が把握された。墳丘の平面的な形状は全体に調査が及んでいないため断定はできないものの、前回調査と今次調査の成果から、直径23m程度の規模をもつ円墳と考えられる。また、周溝は今回の調査で初めて外縁まで把握し、その幅は約9.5mと判明した。これらにより、当古墳の規模は、墳丘の直径23m、周溝を含めた範囲は直径約42mに復元される（図17）。これは平成2年度の調査時に推定された範囲より若干規模が大きくなる想定である。墳丘・周溝の北側約半分は未調査のまま果樹園の下に残存するとみられる。

墳丘については、基底に置かれたとみられるやや大型の石を根拠に墳裾とした位置から墳丘の内側にあたる範囲で「礫敷」を検出した。前回調査では7層にわたる墳丘盛土の存在が指摘されており、今次調査における礫敷上の土層（15・16・17層）がそれにあたる。しかし、それらの下に礫が敷

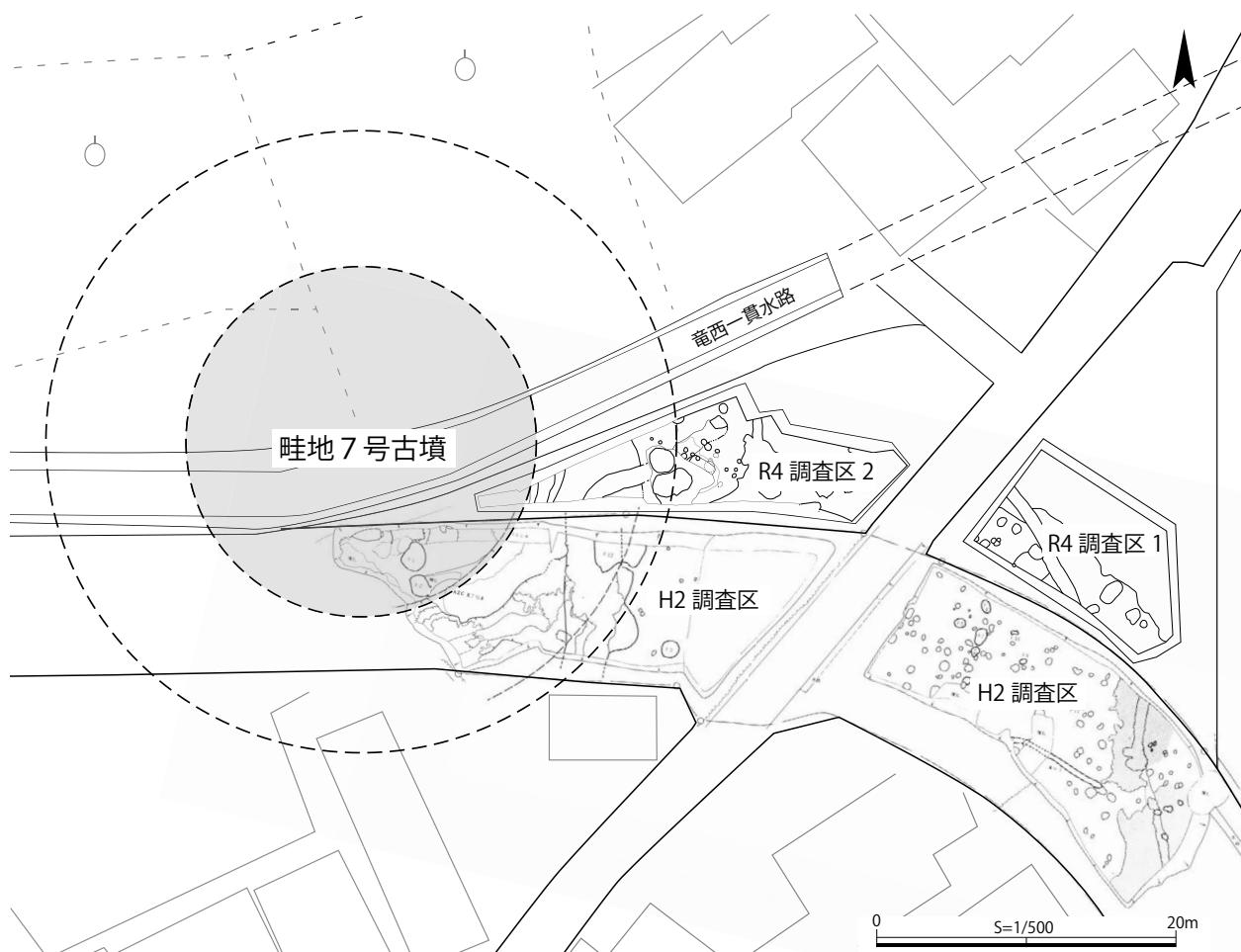


図17 平成2年度・令和4年度調査合成図

かれている点は、過去の調査では言及がない。当該箇所の調査範囲が極めて狭小であったこともあり、礫敷の用途については不明のまま、少なくとも葺石をともなう古墳であったことを確認したにとどまる。なお、埴輪についてはまったく出土しておらず、当初から樹立がされていなかったと考えられる。

埋葬施設については、平成2年度調査で横穴式石室の用材と推定される長さ2m程の石が墳丘の中央付近で確認された。今次調査では主体部に関する直接的な情報は追加されなかつたが、周溝外縁部付近に巨石2個が廃棄されていた。この巨石については、規模や形状などからして石室用材とみられることは報告文中で述べた。これらが当古墳に用いられていたと断定できる状況証拠はないものの、当古墳に横穴式石室が存在した蓋然性は高くなつた。

**築造・埋葬時期** 平成2年度調査で出土した遺物の内訳は、馬具（「引手」）、玉類（切子玉・ガラス玉・白玉）、須恵器（坏身・蓋坏・提瓶・高坏・広口壺・甕）、土師器、須恵器模倣土師器等である。今次調査では須恵器（提瓶・壺・甕）が出土した。そのうちの一部は愛知県猿投窯産の特徴を有する。

古墳時代の須恵器は2点の提瓶がとともにTK10～TK43型式並行期に位置付けられる（小池2010）。その他の遺物について、平成2年度調査の報告書上で馬具の「轡の引手」とされていた鉄製品を再実測し、図18に示した<sup>(1)</sup>。本品は引手ではなく、鞍と面繫・尻繫をつなぐ鞍である。鉄棒を丁字形に曲げて輪金を製作し、別造りの脚部を輪金に巻き付けて結合する。脚部は扁平で先細りする長い鉄材で、先端が曲がりJ字形を呈する。脚の先を鞍橋に打ち込んで固定していたものだが有機質等は付着しない。刺金を欠く脚部・輪金別造りの鞍はTK10型式期以降に盛行する（宮代1996）。

このほか、過去の報告で「翡翠製」<sup>(2)</sup>とされた9点の切子玉は、四角錐形を底面で接合した特異な形態であるものの、計測値は一部を除いて高さ14～17mm、幅9～12mmの範囲に分布する。これらを山陰系の切子玉における法量の傾向を参考に、TK10～TK43型式並行期の所産とみる（大賀2009）。また、白玉・ガラス玉との組み合わせもこの年代観と矛盾しない<sup>(3)</sup>。

以上の再評価した出土遺物を含めても時期を推定できる要素はやや少ないが、当古墳の築造・初葬をTK10～TK43型式並行期とみておきたい。さらに平成2年度調査では、この年代よりも明らかに新相を示す須恵器が多く出土している。これらは概ね7世紀前半から8世紀初頭までの年代幅でとらえられ、座光寺地区のナギジリ1号古墳、上郷地区的飯沼塚田古墳など周辺の古墳と同様に律令期に至るまで追葬等のため利用されていたことを示している。

**破却** 当古墳は古墳時代後期中頃に築造され、その後も追葬の場として利用されたとみられるが、いずれかの時期に破壊を受けている。過去の調査では、墳丘の中央が想定される付近に地山層を掘り込んで大型の石材が設置された痕跡があり、主体部たる横穴式石室の存在が想定されている。副葬品は周溝底部付近の覆土中に分布しており、追葬が終了してからさほど間をおかないうちに盗掘等を受けたことを示唆する。さらに、周溝底部直上に堆積する「明褐色土」が築造後間もなく埋められた可能性が指摘されていたが、今次調査の周溝内堆積土の観察においては、周溝が人為的に埋め

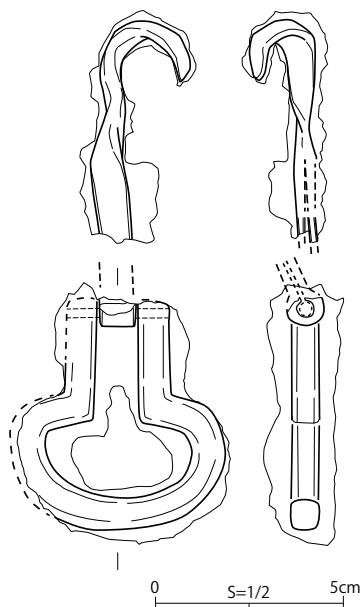


図18 鞍（再実測）

られたことを示す状況は確認できなかった。したがって、周溝がほぼ完全に埋没してから墳丘が削平されたと考える。破壊の時期は不明のままだが、戦前から戦後にかけての古墳伝承を網羅した『下伊那史』にも当古墳の情報自体がないことから、近代を迎える頃までに墳丘はほとんど削平されていたとみられる。

**周辺の古墳・遺跡との関係** 南大島川右岸の扇状地に分布する畔地古墳群7基のうち、実態が判明している古墳は1号古墳と7号古墳のみである。1号古墳は6世紀前半の築造と推定され、7号古墳と1世代ほどの差が想定される。平面L字形の特異な構造をもつ竪穴系横口式の横穴式石室と、銀製長鎖式垂飾付耳飾が出土したことで知られる1号古墳は、一帯を見渡すことができる尾根突端部の高台に所在する。7号古墳は1号古墳を見上げる位置にあり、両者の関係は密接なものと考えられる。また、7号古墳の南方約250mの地点に所在する高岡第1号古墳は、6世紀前半の築造と推定される全長70m級の前方後円墳で、座光寺地区最大の首長墓である。さらに同時期、一帯を見下ろす段丘端部に小型前方後円墳の北本城古墳が築造される。これら3基の主要古墳の埋葬施設は竪穴系横口式の系譜をひく特徴的な石室をもつ。石室構造を共有する3古墳の築造時期について、瀧谷恵美子は石室構造や副葬品、埴輪などを根拠に、北本城→畔地1号→高岡第1号の順と推定し、6世紀初頭から前半までの年代に収めている（瀧谷1997）。先に示したとおり、畔地7号古墳はこれらの古墳よりも築造年代が下ることは確実であり、瀧谷が示した築造順において高岡第1号古墳の後の段階、すなわち6世紀中頃に当古墳を位置付けたい。よって、畔地7号古墳は特徴的な横穴式石室を採用した3基の古墳の後継にあたる有力階層の墓と推定する。当古墳以前の主要古墳のうち2基が前方後円墳であるのに対し、これ以降に座光寺地区で前方後円墳は築造されず、埴輪の樹立もなくなるなど、当該期は座光寺地区において重要な画期といえる。おそらく当古墳と同段階に比定されるであろう石塚1号・2号古墳は、本格的な無袖式の横穴式石室を具える有力古墳である。両者は距離が離れるものの、東側に広がる集落域を見渡す高い地点に築造されている点は共通しており、ともに首長墓の系譜に連なることも首肯されよう。一方で、その後に南大島川のさらに上流側に築造された壹丈藪古墳群や、土曾川沿いに築かれたナギジリ古墳群などとは、集落域から離れた谷筋の墓域として、畔地7号古墳と性格を異にする。これは時代が下るにつれて墓域がさらに奥地に移動したことによるものであろう。以上のように、二度にわたる当古墳の調査により、6世紀初頭の横穴式石室導入後から古墳時代の終焉に至るまでの主要古墳の変遷がある程度追えるようになったことは、地域史上で大きな意義をもつ成

	年代 (須恵器)	座光寺地区所在古墳	飯田古墳群 (他地区)
400	TK73	石行・新井原・高岡・畔地系列 石行2号 新井原2号 高岡4号	その他
	TK216 ON46	新井原7号	
	TK208	新井原12号	溝口の塚 塚原二子塚
	TK23 TK47		
500	MT15	畔地1号 北本城	姫塚
	TK10	高岡第1号	飯沼天神塚
	TK43	畔地7号 石塚1・2号	上溝天神塚 御猿堂
	TK209	壹丈藪古墳群 ナギジリ古墳群	おかん塚 馬背塚
600			伊那郡衙 (寂光寺?)

図19 座光寺地区古墳変遷試案

果である。

最後に、恒川官衙遺跡（伊那郡衙）との関係について触れておきたい。当古墳ほか周辺の古墳で奈良時代に至るまで利用された形跡が認められるように、一帯の古墳は律令期を迎えるまで集団の墓や祭礼の場となった。このことは、座光寺地区内で長期にわたる在地集団の一貫性を示唆する。中期古墳の高岡3号古墳においても律令期の儀礼痕跡が確認されたことは、祖靈祭祀の場として官衙にかかわる人々に用いられていたことは想像に難くない（飯田市教育委員会 1990）。以上の事実は、古墳時代から発展を遂げ、伊那郡衙の成立へと結実するという、座光寺地区に特有の歴史的推移の一様相といえる。

## 註

- (1) 鎏化が進行していたため保存処理を実施し、X線写真の情報を得たうえで実測した。なお、平成元年度調査の報告時点では脚部と輪金は一体で図示されているが、現状は破断して分離し、接合しない。
- (2) 平成2年度の調査報告では翡翠製とされたが、碧玉もしくは凝灰岩製と思われる。
- (3) 玉類については広島県教育事業団の岸本晴菜氏よりご教示をいただいた。

## 引用・参考文献

- 大賀克彦 2009 「山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究－古代出雲における玉作の研究Ⅲ』 島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
- 岡田正彦 1986 「飯田市座光寺石行遺跡発掘調査概報」『伊那』1986年6月号 伊那史学会
- 岩崎卓也 1987 「尾張型須恵器の提唱」『信濃』39巻第4号 信濃史学会
- 角脇由香梨 2006 「古墳時代の須恵器生産－東山古窯跡群の性質をめぐって－」『きりん』第9号 荒木集成館友の会
- 小池寛 2010 「須恵器提瓶考」『京都府埋蔵文化財論集』第6集 公益財団法人京都府埋蔵文化財センター
- 瀧谷恵美子 1997 「飯田市座光寺の古墳－畦地1号古墳出土資料を中心に－」『飯田市美術博物館研究紀要』7 下伊那誌編纂会 1955 『下伊那史』第2巻
- 下伊那地質誌編集委員会（編） 1976 『下伊那の地質解説』
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 宮代栄一 1996 「古墳時代の金属装鞍の研究－鉄地金銅装鞍を中心に－」『日本考古学』第3号 日本考古学協会
- 報告書**
- 飯田市教育委員会 1990 『高岡遺跡－高岡3・4号古墳－』（飯田市座光寺古市場地区市道改良工事に先立つ埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書）
- 飯田市教育委員会 1992 『畦地下遺跡－畦地7号古墳－』（飯田市座光寺古市場地区市道改良工事に先立つ埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書）
- 飯田市教育委員会 1998 『ナギジリ1号古墳』
- 飯田市教育委員会 1999 『新井原・石行遺跡』
- 飯田市教育委員会 2009 『切石遺跡群』